

<書評>

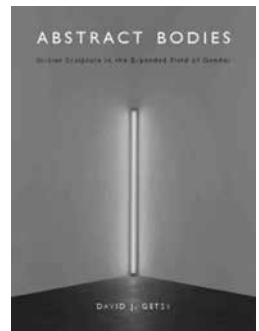
David J. Getsy 著

Abstract Bodies:

Sixties Sculpture in the Expanded Field of Gender

(Yale University Press 2015 392頁 ISBN: 978-0-300196757 US\$65.00)

宮内裕美



本書は、1960年代におけるアメリカの彫刻について、トランスジェンダー研究の成果を踏まえて、ジェンダーやセクシュアリティの観点から問い直すことを目的としている。著者はまず、1960年代における彫刻表現と同時代の批評及び受容について、その実態と呼応関係を確認する。当時の彫刻においては、その概念の問い直しのみならず、様態やメediumの抜本的な変更と拡張が現実となった。また、ジェンダー、セックス、といった人間の身体にまつわる概念や定義が問い直され、根本的にとらえ直されてゆくのもこの時代である。著者は、こうした同時代的な状況に対する彫刻的实践の側からの応答に着目し、これまで十分に議論されてこなかった彫刻作品をとりあげ、作品とその制作状況に関する資料を掘り起こし、見直す、という歴史学的手法を用いて考察を進める。こうした考察を通して、著者は、身体イメージに関する議論の蓄積がある美術史学研究がトランスジェンダー研究にとって豊かな事例を提供し、トランスジェンダー研究の視点が美術史学研究における身体像とそのメタファーの解釈に対して新たな視点を提供する、という相互参照的な成果を想定している。本稿では、著者の議論の背景と著書の内容について簡潔に記しつつ本研究の着眼点を整理し、その意義について指摘する。

彫刻はその歴史において、多くは人間の身体を表すものであり、その模倣であり、それを喚起させる三次元の芸術的实践であった。また、展示空間において、作品が物質的对象として観者との関係において存在することは、彫刻的实践における課題であった。20世紀に入り、身体像中心の彫刻的伝統はモダニズムの文脈で問い直され、新たな彫刻の様態が試みられた。例えば、20世紀初頭の彫刻的实践において、あいまいな身体を表象は伝統的なジェンダー規範を想起させるものとして機能した。1960年代に入ると、身体を模す彫刻は否定され、抑圧され、「抽象性」「非参照性」が彫刻の中心的主題として追及される。しかしながら、依然として彫刻に共通の性質として身体が喚起され、彫刻から身体性を切り離すことは不可能であった。自立する人間のプロポーション、正面性、身体の構造、を喚起させる等身大の彫刻的オブジェ、等を通して、伝統的な彫刻の形態や定義は引き継がれ、人間の身体イメージが彫刻に残存する一方で、1960年代の彫刻における動向は同時代の複雑で多様な身体のあり方に対応し、その様式をより広範なものとしてゆく。結果として、彫刻の抽象化と彫刻的な形態を介した身体の喚起は連動して活性化することとなった。

著者は、1950年代にはじまり1960年代に隆盛を極める彫刻における徹底的な見直しの特徴について、同時代の批評家を参照してまとめている。1960年代の彫刻は、クレメント・グリーンバーグ (Clement Greenberg) やマイケル・フリード (Michael Fried) といった批評家が指摘し先導したように、メediumを問い直し、素材の実験を繰り広げ、身体の再現としての彫刻の形態を放棄して、非参照性と客体性を獲得したとされる。その一方で、1960年代の彫刻が抽象性や非参照性に限定されない特性を有

していたことを指摘するため、著者はさらにロザリンド・クラウス (Rosalind Krauss) とルーシー・リップパード (Lucy Lippard) を参照する。クラウスは、その論文“Sculpture in the Expanded Field”において、伝統的な彫刻の技法や理論への依存からの脱却を目指す実践をとりあげ、次世代以降の芸術を牽引する理論的支柱となった。著者は、クラウスの分析において、彫刻が偶発的で可変的なジェンダーの要素を取り込みうるものとして解釈されていると指摘し、自身も著書のタイトルとした「拡張する領域」(expanded field) という用語を、当時の彫刻の動向を示すのみならず、同時代のジェンダーを巡る動向をも端的に示すものと定義する。また、リップパードは、1966年秋にニューヨークで開催されたEccentric Abstraction展と同年11月にArt International誌に掲載された同名の論文、翌1967年春にHudson Reviewに掲載された論文“Eros Presumptive”を通して、当時の主要な芸術動向に属さないアーティストたちをとりあげ、その作品の抽象的でエロティックな形態がジェンダーの可変性と多様性を示す実践であることを指摘し、抽象芸術において象徴性を排除されたオブジェと身体性がどのように関連づけられるかを提示した。著者は、リップパードの批評がジェンダーとセクシュアリティに関する議論を広く推し進めたことを初期フェミニズムの成果として評価しつつも、その展示と分析の対象選定および分析におけるエロティシズムの解釈については、限定的なものにとらえている。

1960年代の彫刻は、その「抽象性」と「非参照性」を先鋭化させたが、そうした作品には身体性が根強く潜んでおり、一部の批評においてもこの特質が読みとられた。加えて、1960年代はジェンダーの概念が根本的にとらえ直された時代であり、社会的、医学的、政治的に、トランスジェンダーへの視野が開かれた時代でもあった。トランスジェンダーという概念は、ジェンダーの変動をより広範に参照することを可能にする側面をはらみ、1970年に入ると反動を引き起こしながらもポップカルチャーに浸透し、その文脈を広げ、今日に至る。著者はこうした時代背景を踏まえ、この概念を、考察対象とするアーティストたちの作品に固有のジェンダーの可変性、多様性といった特徴を説明し、強調するものとして用いている。具体的には、第一章ではデイヴィッド・スミス (David Smith)、第二章ではジョン・チェンバレン (John Chamberlain)、第三章ではナンシー・グロスマン (Nancy Grossman)、第四章ではダン・フレイヴィン (Dan Flavin) がとりあげられた。いずれの事例も、これまでの批評においてはジェンダーやセクシュアリティの観点からは十分に議論されてこなかったが、著者はそれらをジェンダーやセクシュアリティが何らかのかたちで参照されている抽象彫刻として位置づけ、抽象と非参照性を達成しつつ、身体やセクシュアリティを喚起させ、身体メタファーとして機能する1960年代の先行事例として考察している。

第一章のスミスの章では、スミスとフランク・オハラ (Frank O'Hara) との対話に着目し、スミスがオハラの目を通して自身の彫刻を見ていることを自覚する過程を示し、作品におけるジェンダーのあいまいさとアーティストの言説が作品分析において再生産される様を分析する。第二章のチェンバレンの章では、彫刻として積み上げられた素材の変移に着目し、チェンバレンが新しい形態を創造するため、作品をなす部位を組み合わせる過程を説明するものとして性的メタファーを用いる様を分析する。第三章のグロスマンの章では、日常的な素材を用いた身体の表象が、性差をまとうものから抽象化された身体の表象へと移行する過程を分析する。第四章のフレイヴィンの章では、その作品の互換性と命名のルールに着目し、大量生産のオブジェを選択し、アートのオブジェとして再配置することでもたらされる作品について分析する。こうした分析を通して、著者はこれらの作品が当時の彫刻をめぐる複雑で広範な問題を明らかにし、多様で決定不可能なジェンダーやセクシュアリティを喚起させる仕組みとして機能

していたことを指摘する。さらに、結論部分では、1960年代の抽象彫刻がはらむ問題意識を共有する現代に活躍するアーティストたちをとりあげ、かつての抽象において実践された方法論がより明示的にジェンダー的な戦略として機能している事例を分析することで、著者は自身の考察の有効性を検証している。

1960年代の批評や先行研究から分析の視点の有用性を引き継ぎ、同時代の社会的・文化的背景を踏まえてトランスジェンダーという概念を導入することで、著者はこれまで作品において不可視化されてきた抽象的な身体の含意を明らかにし、その視点を後年の作品にまで敷衍する。本研究は、緻密な分析の事例を提供することを通して、モダニズム的視点からの分析が支配的であった1960年代の彫刻研究に新たな視点を付与するものである。また、従来のフェミニズム美術史の立場からの分析を補完し、ジェンダーやセクシュアリティの研究に新たな視点をもたらす試みとしても意義深い。一方で、本研究は、抽象的な彫刻の内に既存のジェンダー規範を乗り越えるダイナミズムを見出す試みでもあった。著者がトランスジェンダーという概念で照射した作品とその分析手法について、その妥当性をめぐるさらなる検証を待つとしても、本書が美術史学とジェンダー研究双方に果たした寄与は決して小さくないものと考えられる。

[参考文献]

- Clement Greenberg, "Cross-Breeding of Modern Sculpture", (1952) in John O'Brian ed., *The Collected Essays and Criticism*, Vol. 3 (Chicago: University of Chicago Press, 1986), pp. 107-17.
- , "Modernist Painting", (1960) in John O'Brian ed., *The Collected Essays and Criticism*, Vol. 4 (Chicago: University of Chicago Press, 1986), pp. 85-91.
- , "Sculpture in Our Time", (1958) in John O'Brian ed., *The Collected Essays and Criticism*, Vol. 4 (Chicago: University of Chicago Press, 1993), pp. 55-61.
- , "The New Sculpture", (1949) in John O'Brian ed., *The Collected Essays and Criticism*, Vol. 2 (Chicago: University of Chicago Press, 1986), pp. 313-19.
- Michael Fried, "Art and Objecthood", in Gregory Battcock ed., *Minimal Art: A Critical Anthology* (Berkeley: University of California Press, 1995), pp. 116-147.
- Lucy R. Lippard, "Eccentric Abstraction", in *Changing: Essays in Art Criticism*, pp. 98-111.
- , "Eros Presumptive", in Gregory Battcock ed., *Minimal Art: A Critical Anthology* (Berkeley: University of California Press, 1995), pp. 209-21.
- Rosalind Krauss, "Sculpture in the Expanded Field", *October*, Vol. 8 (Spring 1979), pp. 33-44.

(みやうち・ゆみ お茶の水女子大学文教育学部 アカデミック・アシスタント)

掲載決定日：2016（平成28年）12月2日